

固有名詞の普通名詞化語彙少考

随想風に，袖珍辞書風に

森 田 孟

釣りをする人，釣り好きを指して「太公望」という。言うまでもなく，周の西伯（文王）と武王の二代に師父として仕え，武王を援けて殷の紂王を滅し，周王朝の基を築いた太公望呂尚に因む語である。西伯に「吾太公望子久矣」（吾が太公〔祖父〕，子を望むこと久し）（史記，齊世家）と言われてそう呼ばれることになった。彼は，西伯に見い出されるまでは読書ばかりして清貧に甘じ，他の時間は渭水のほとりで釣り糸を垂らしていた。それで妻に愛想を尽かされて離縁されたが，後に復縁を求められると「覆水定難収」（覆水は定めて収め難し）と言って断った（『鶡冠子』）。後に「覆水盆に返らず」と有名な諺になる。

「土左衛門」といえば，水死体のことだが，これは享保年間（1713 - 36）の江戸の力士，成瀬川土左衛門の身体が頗る肥大であったので世人が溺死者の膨れ上がった遺体を，土左衛門のようだ戯れたのに起るといふ。この戯れは戯れにしる少々棘があつて，土左衛門関にとっては余り有難くない譬喩だつたであろうが，奇妙に温かみが無くもなくて何となくユーモアも感じさせる。この力士，大兵に似ず弱かつたのであろう。だから，そのような状態なら溺れ死んだほうがまだぞ，という江戸子らしい励ましの意も籠っていたに相違ない。釣り好きを指す「太公望」も，のんびりした暇人のようだが実は大物なのだろう，という温かい眼と心が籠っている。

となると，いきなり「太公望」と「土左衛門」を並べるとは不謹慎だといふ誇りは免れるだろうか。共に人名（固有名詞）がそのまま普通名詞に転用された典型例としてまず挙げてみた。

彼は順慶だ，あれは順慶流だね，などという。筒井順慶が山崎の合戦（1582）で，明智光秀に味方するとみせかけて実は豊臣秀吉に通じたことから「二心を抱いて去就を決しないこと」「二股膏藥」の意となった。

「洞が峠 [を極め込む]」 = 「両方を比較し、有利な側に味方しようとして形勢を見守ること」「日和見」も、筒井順慶がどちらにつこうかと形勢を見たのが、京都と大阪の境にあるこの峠であったことに由来する語句である。人名・地名の普通名詞化例だ。

そうそう、尻取りを気取るつもりはないが「慶庵」といえば、「口入屋」「雇い人の周旋業 [者]」 現在はこの業は法律で禁止されているの意である。江戸の医者大和慶庵が、よく縁談の仲介をしたことから生じた語とされる。

大工さん達の職人言葉には「西行」というのがある。「大工などが道具一式だけを持って各地を回り、職人としての腕を研ぐこと、またはそういう人」を指す。西行法師が諸国を遍歴したことに由来し、「旅職人」のことも表わす。私は今、西行中 (= 修業中) です、などというのは洒落ていよう。

「人まねをする滑稽を笑う表現」を指して「西施捧心」という。春秋時代、越の美女西施が故郷に帰って胸を病み、胸に手を当てて顔を顰めたところ、それが非常に美しく見えた。西施の美貌に及ぶべくもない村の女たちが、皆それをまねて胸に手を当てては顔を顰めたので、人々はその醜さに恐れをなして逃げ出した、という故事に拠る。『莊子』の「天運篇」にみえる話である。「捧心」とは、胸をかかえる悲しみの動作のこと。「効顰」(ひそみにならう)なる語もこの故事に由来する。『奥の細道』の中の芭蕉の秀句「象潟や雨に西施がねふの花」は余りに有名だ。西施は越王句踐の寵妃であったが、越が会稽の戦いに敗れて、呉王夫差に献じられた女性であった。雨に葉を閉ざした合歡に、眼を閉じて愁いに沈む西施の姿を芭蕉は想像したのである。

人名や故事に言及する引喩の類は、古来、西欧や中国は無論、日本でも『萬葉集』の時代以来広く、詩作に普通に使用されてきた手法であるが、現代では一層重要な作詩法であり、文芸作品のみならず日常の会話でも生彩を生み出す修辞になっている。

彼はネロ [ヒットラー、スターリン] だ、と言え、その人物が、それぞれ歴史上の人名が想起させるような「暴君」だということである。同様に「ドン・ジュアン [ドン・ファン]」で「女たらし」を、「マキアヴェッリ」で「権謀術数家」を表わす。「ソロモン」といえば「賢者」のこと。このように、ある特徴で著名な固有名詞を、普通名詞に代用す

ること、即ち、ある固有名詞によって、それが最も顕著に表わす特質や様相を示す修辞を、英語では“antonomasia”(アントノメイジア)[フランス語では“antonomase”(アントノマーズ)]「代称」「換称」と称する。

以下、本稿では、実在か想像・創造上かを問わず、人名、場所、建物などの固有名詞に由来する、もしくは関わる主に英語圏の普通名詞(動詞、形容詞も含めて)で筆者個人が面白いと思ってきたものを専ら思いつくままに若干、辞書風に列挙してみたい。

[ア行]

アルセスト(Alceste)「人間嫌い」「厭人癖」。モリエール(Molière, 1622 - 72)の性格喜劇の最高傑作とされる韻文五幕の『人間嫌い』*Le Misanthrope* (1666)の主人公で、習慣、お世辞、不正、打算などを極端に嫌悪して遂には全ての人間に挑戦する人物から。

アルバゴン(Harpagon)「守銭奴」「吝嗇漢」[1721]。笑劇手法を縦横に駆使したモリエールの名作『守銭奴』*L'Avare* (1668)の主人公で、自分の金を盗まれるのではないかと恐怖に駆られる貪欲な老人の名から。

イスリエルの槍(Ithuriel's spear)「真偽を試す確実な基準」。ミルトン(John Milton, 1608-74)の名作『失樂園』*Paradise Lost* (1667)[第4巻810行]に登場するイスリエル(「神の発見」の意。ミルトンの造語)はガブリエルからサタン探索の命を受けた天使だが、彼が、少しでも触れると欺瞞を暴くことの出来る槍を、持っていたことから。後にカリフォルニア周辺原産のユリ科ハナニラ属の草本(triplet lily)の名称にもなる。

ウェラリズム(Wellerism)「名言・名句を面白可笑しく引用すること」[1839]。英国の小説家ディケンズ(Charles Dickens, 1812 - 70)作の『ピクウィック・ペーパーズ』*The Pickwick Papers* (1836 - 37)に登場するサム・ウェラー(Sam Weller)及びその父親の言葉遣いから。

ヴェルテリズム(Wertherism)「ヴェルテル気質」「ヴェルテル流感傷癖」「病的感傷性」[1831]。ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749 - 1832)作『若きヴェルテルの悩み』*Die Leiden des Jungen Werthers* (1774)で報われない恋に悩んで自殺する主人公 Werther より。

ウォーターゲイト (Watergate) 「[権力の乱用, 不法行為, 隠蔽工作などが絡んだ] 政治スキャンダル」。俗語では「政治上の陰謀に巻き込む, 加担させる」「政治上の醜聞を暴露する」という意味の動詞でも使われる。1972年に共和党側の人物7人 (Watergate Seven と呼ばれる) が首都 Washington D.C. の民主党本部がある建物「ウォーターゲイトビル」に侵入して, 不法行為を働いたことに始まる一連の政治上の醜聞が生じて, 1974年に Nixon 大統領が引責辞職した「ウォーターゲイト事件」に由来する語。これに倣って出来た語が実は他に二語ある。在米韓国人の実業家によるアメリカ国会議員買収事件が1976年に表面化して「**コリアゲイト**」「Koreagate」(< Korea (朝鮮) + gate) が生れた。

1998年には「不適切な関係」「inappropriate relationship」なる語が誕生?して流行したが, さすがは?アメリカ大統領が発生源だけに味のある表現で, 「不倫」などに取って替わる婉曲上品なる?語としてその後も愛用されているのではなからうか。クリントンさんの相手方の名前から「**モニカゲイト**」「Monicagate」が出現した。モニカ嬢とクリントン前大統領との「関係」のようなものを指す。

エドセル (Edsel) 「失敗作」「売れない製品」。フォード家の息子 Edsel Ford (1893 - 1943) の名から命名されたフォード社の大型車“Edsel”から。大々的な販売戦略にも拘わらず大失敗だった (1957 - 59)。この車名については実は詩人マリアン・ムーア (Marianne Moore, 1887 - 1972) がアイデアを求められて幾通りかの詩情に富む案を出したが結局採用に到らなかった (Charles Molesworth, *Marianne Moore : A Literary Life* [New York : Atheneum, 1990] pp.388-90, 参照)。

エルギニズム (Elginism) 「エルギン式文化財盗み出し」。大英博物館には「エルギン大理石彫刻群」(Elgin marbles) なる古代ギリシャの名作群がある。元来アテネのパルテノンにあったもので, 紀元前5世紀におそらくギリシャの彫刻家フィディアス (Phidias, c500 - 432 ? B.C.) の指揮下に製作されたと考えられている。アテネから大英博物館に移す手配をした第7代エルギン (Elgin) 伯トマス・ブルース (Thomas Bruce, 1776 - 1841) の名に因む。

エルマー・ガントリ (Elmer Gantry) 「偽善的な宗教家」。米国人初のノーベル文学賞 (1930) を受賞した作家シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis, 1885 - 1951) の小説 *Elmer Gantry* (1927) の主人公から。

エレミヤ (Jeremiah)「現在を悲観して将来を憂う人」「悲観主義者」。悲哀の預言者と呼ばれた紀元前6 - 7世紀の大預言者 (Major Prophet) その人の名から。旧約聖書中の「[エレミアの]哀歌」*Lamentations* 参照。長く続く嘆き、悲嘆、泣き言、恨み言を「エレミヤの嘆き」(jeremiad) という。

オッカムの剃刀(Ockham's [Occam's] razor)「節減の原理」(Principle of economy [parsimony])「[1901]」「或る事柄を説明したり議論するのに仮説は必要以上に定立してはならない」という格言。アリストテレスに遡源するものであるが、イギリスのスコーラ哲学者・フランシスコ会士のウィリアム・オブ・オッカム (William of Ockham, c.1285 - 1347/9) が議論で多用して当時のスコーラ学の理論に登場する種々の要素を切り捨てたことに由来する。

[カ行]

カムストックぶり (comstockery)「[真面目な芸術作品も猥褻と看做すような] 極端な道徳上の見地からの検閲, 取り締り」「上品ぶった態度」[1905]。アメリカの社会改革者, 猥褻検閲家 (smut-hunter) として有名だったアンソニー・カムストック (Anthony Comstock, 1844 - 1915) に因む。

ギャリソン仕上げ (Garrison finish)「[競馬などでゴール寸前の] 追い込み勝ち」「逆転勝利」[1935]。おそらくこのやり方でよく勝利を収めた19世紀米国の騎手エドワード・ムチ打ち・ギャリソン (Edward "Snapper" Garrison) の名に因む。

クウィズル(quisle)「敵のために働く」「国を売る[行動をする]」「裏切る」[動詞]。ナチスに内通したノルウェーの政治家ウィドカン・クウィズリング (Vidkun Quisling, 1887 - 1945) から生じた。1940年にドイツがノルウェーに侵入した後、彼は一時期、Naziの傀儡政府を樹立した。彼の名前そのものも「クウィズリング」なる普通名詞になって、「[侵略者を助けて祖国を裏切る] 売国奴」「裏切者」「自国の内部崩壊を企てる者」[1940]の意となった(= quisler)。世に、裏切り行為に優る卑劣もないが、政治家になってこのような形で名を残すとは哀れである。

クックス・ツアー (Cook's tour)「[広範且つ細部にわたって見物す

る] 過密な旅行][1906], 英国の旅行案内業者でホテル制度の創始者トマス・クック (Thomas Cook, 1808 - 92) の名に因む。旅行会社「トマス・クック」社 (Thomas Cook) を創始したのも彼で、この会社は「トマス・クックヨーロッパ時刻表」*Thomas Continental Timetable* を毎月発行する。

グランディ [夫人] ([Mrs.] Grundy) 「世間 [の口 (癖)] ・世評」「狭量で世間の仕来りに極めてやかましい人」「因襲に捕らわれた上品ぶった人」。英国の劇作家トマス・モートン (Thomas Morton, 1764? - 1838) 作の喜劇『鋤めでたかれ』*Speed the Plough* (1798) [Act I. sc. i] に登場する Dame Ashfield が、何事によらずその隣人である農家の妻 Mrs. Grundy の思惑を気にし恐れては口癖のように「グランディ夫人は何て言うだろう [どう思うかしら]」「What will Mrs. Grundy say [think] ?」といったことから。文例：“Many are afraid of God, and more of Mrs. Grundy.”「神を恐れる者は多いが、世間を恐れる人はなお多い」。“I have not the smallest regard for the Grundy tribe.”「グランディの類には些かの関心も抱かない [世間の口など少しも気につけぬ] 。

「社交界の法則を支配する人」。固苦しい身持ちの正しさを誇り道徳家ぶる老婦人だったワシントン社交界の支配者フェリクス・グランディ夫人 (Mrs. Felix Grundy) の名の普遍化。

グランディズム (grundyism) < Mrs. Grundy. 「特に個人の言動における」上品ぶった因襲固執」「過度の因襲尊重」「世間体を気にする [重んずる] 言動 [やり方] 」 [1836]

クレイグの妻 (Craig's wife) 「整頓好きすぎて人をゆったりさせない女」。米国の劇作家・俳優ジョージ・ケリー (George Edward Kelly, 1887 - 1974) の劇 *Craig's Wife* (1925) の主人公の名から。

クレオパトラの鼻 (Cleopatra's nose, Le nez de Cléopâtre) 「重大な影響を及ぼす小さな事柄」。ブレーズ・パスカル (Blaise Pascal, 1623 - 62) の警句からである。彼の『パンセ』*Pensées* (1670年初版) L.413, B. 162に出てくる。“Le nez de Cléopâtre s'il eût été plus court, toute la face de la terre aurait changé.” (英訳 : If Cleopatra's nose had been shorter, the whole face of the earth would have changed.) 「クレオパトラの鼻、それがもう少し低かったら、地球の全表面は変わっていたらう」。

クレオパトラ 7 世は言うまでもなく絶世の美女として知られた、プト

レマイオス朝エジプトの女王（69 - 30B.C., 在位 51 - 30B.C.）ローマの英雄カエサルを魅惑してその子を生み、将軍アントニウスとも結ばれ、その政敵オクタヴィウスに追われて自害した。大帝国ローマの歴史が、美女の鼻のわずかな高低差によって翻弄されたのだと見たパスカルの炯眼な洞察力には改めて圧倒されよう。尚、「クレオパトラの針」（Cleopatra's Needle）とは、古代エジプトの Heliopolis にあった二つのオベリスク「方尖塔」（obelisk）の名称。現在はニューヨーク市の Central Park とロンドンのテムズ河畔に移されている。

クレリヒュー（clerihew）英詩の一詩型の名称。押韻する対句（aabb）から成る長短不同の四行詩で、著名人や歴史上の人物の名前で始まり、その人の特徴などを諷刺した滑稽な詩のことである。探偵小説や寸伝集の著書で知られる英国の作家エドモンド・クレリヒュー・ベントリー（Edmond Clerihew Bentley, 1875 - 1956）が創始した。彼が16歳の時に創った最初のクレリヒュー作品は次の一篇である。[] 内が各行の行末語。

Sir Humphrey Davy	ハンフリー卿ディヴィーは
Detested gravy .	肉ソース [グレイヴィー] が嫌いだった。
He lived in odium	彼は嫌悪 [オウディアム] して生きた
Of having discovered sodium .	ナトリウム [ソウディアム] を発見した ことを。

「ソウディアム」とはナトリウムのことで、英国の化学者ハンフリー卿（1778 - 1829）が発見して造語命名した。彼は「ディヴィー灯」（Davy lamp）初期の鉱山用安全灯の一種で、炎を金網で囲って坑内空気中のメタンガスに着火しないようにしたもの の発明者でもある。

次の二篇もベントリー自作のクレリヒューである。

Edgar Allan Poe	エドガー・アラン・ポウは
Was passionately fond of roe .	熱烈な魚卵 [ロウ] 愛好者だった。
He also liked to chew some	彼はまた幾らか [サム] 噛んでい
When writing anything gruesome .	たがった ぞっとする [グルーサム] ようなも のを書いている時には。

The art of Biography	伝記 [バイオグラフィ] という芸術は
Is different from Geography .	地理 [ジェオグラフィー] とは違う。
Geography is about Maps	地理は地図 [マップス] についての
But Biography is about Chaps .	もの
	だが伝記は奴ら [チャップス] につ
	いてのもの。

クレリヒューは、その後多くの作者が試みてきたが、特に、種々の詩型を駆使してみせたオーデン (W. H. Auden, 1907 - 73) が晩年にアメリカの詩人オグデン・ナッシュ (Ogden Nash, 1902 - 71) の霊に捧げた「学苑落書き集」“Academic Graffiti”(1971) は、61篇の「クレリヒュー」を収録したこの詩型の模範集である この全訳とそれについての論考は、拙稿「独自の詩の声 オーデンの『学苑落書き集』」 「文藝言語研究 文藝篇」28 (筑波大学文芸・言語学系紀要, 1995年9月20日刊) を参照されたい。

ゲリマンダー(gerrymander) [Gerry + (Sala)mander blending(混成語)] 「自分の党に有利になるように選挙区を区割りする, 改定する」 「不当に手を加える」[動詞] マサチューセッツ州知事 (後に副大統領 [1813 - 14] になった。そして、独立宣言署名者の一人でもある) エルブリッジ・ゲリー (Elbridge Gerry, 1744 - 1814) は、1812年に自らの共和党に有利なように同州の選挙区を改定したが、改定後のこの州のEssex 郡の地図は、「サラマンダー」“Salamander”(山椒魚, あるいは火の中に住むと考えられた伝説上の火トカゲ) の姿そっくりになったことからの傑作造語である。“gerrymander”の訳語は「ゲリー火蜥蜴化する」とでもなろうか。

ゴールドウィニズム(Goldwynism) 「ゴールドウィン流言い回し」 「言葉のおかしな使い方や慣用語の誤用などによるユーモアのある滑稽な表現」 例えば、「元気を出せ, へこたれるな」の意の “Keep a stiff upper lip.”あるいは “Keep one’s chin up.” を “Keep a *stiff upper chin.*” と言ったり, 「自分を勘定に入れてくれ」の意の “Count me in.” または “I wish to be included. (= Include me. Don’t exclude me out.)” を “*Include me out.*” と言ったりすること。これは、ポーランド生れの米国の映画製作者でMGM映画 (1924) の生みの親の一人サミュエル・ゴールドウィ

ン (Samuel Goldwyn, 1884 - 1974) に因む語である。外国人の移民だった彼は、この種の奇妙な表現をすることが少なくなかったからだが、彼が有名人だった故に生じた語である。

人名に由来するものではないが、ついでに触れておけば、前後の意味の滑稽な矛盾やすっとん狂なおかしな話、言葉や表現上のとんちんかんな誤りを「ブル」(bull)と呼ぶ。あの、去勢された成熟の雄牛を指す語と全く同じ綴り字の語である。アイルランド人はしばしば、一見尤もらしいが矛盾した滑稽な話を平気でするといっているので、そのような表現を特に「アイリッシュ・ブル」(Irish bull)と称する。実際はアイルランド人への差別意識から生じたものでもあろう。例：“It is impossible that I should have been in two places at once, unless I was a bird.” 「まさか、ぼくが一時に二か所^{どき}にいたなんてことがあってたまるかい、鳥じゃあるまいし」(鳥ならそのようなことが出来るみたい！)

“I'm too busy to do nothing” 「ぼくは余りにも多忙なので、何もしていないなんてことは出来ない」(何となく変な表現だ！)

“He's the kind of guy who looks you right in the eye as he stabs you in the back.” 「彼は人の眼をまっすぐ見詰めながら人の背中を刺すような奴だ」(ブーメランのような視線を放てる超人だ、これは！)

[サ 行]

サイモンピュア (simonpure) 「[間違いでなく] 真物の、正真正銘の、真正の (genuin), 正当・純粹ぶった」 「[アマチュアスポーツなど] 金で汚れていない、潔癖な」 [形容詞] [1718] これは “the real Simon Pure” の短縮形。英国の女流劇作家ズザナ・セントリーヴル (Susannah Centlivre, 1667 - 1723) 作の戯曲『妻に思い切って一打ち』 *A Bold Stroke for a Wife* (1718) の中で、氏名を詐称された人物に因む。

サイモン・リグリー (Simon Legree) 「残酷で無慈悲な主人 [雇い主、先生など]」。米国の小説家・奴隷制廃止論者ストウ夫人 (Harriet Beecher Stowe, 1811 - 96) 作『アンクル・トムの小屋』 *Uncle Tom's Cabin* (1852) に出てくる残酷・無慈悲な奴隷商人の名から。彼が最後に Tom を打ち殺す。

サルダナパルスの (Sardanapalian) 「贅沢 [放蕩] 三昧の」 「快楽に耽

る」[形容詞][1863] 退廃行為で有名な伝説上のアッシリア帝国最後の王 Sardanapalus に由来する。

シーシュポスの石(the stone of Sisyphus)「無駄骨折り」/“Sisyphean” [sisɪfi:ən] [形容詞]「果てしない、きりのない」「無駄骨折りの」。コリント (Corinth) の邪悪狡猾な王シーシュポスは神罰を受けて地獄に落とされ、大石を押し上げるが石は頂上近くで転落し、永遠の労苦を続けたというギリシャ神話に因る。同類の句に「**オクノスの縄**」(the rope of Ocnus) がある。オクノスが縄をなつてゆくはしから口バがこれを食べたというローマの寓話から。オクノス = 無駄骨の擬人化。

シドニー・カートン (Sydney Carton)「献身愛・自己犠牲愛 [の具現者]」。ディケンズ作の『二都物語』 *A Tale of Two Cities* (1859) に登場する弁護士。愛する女性のためにその夫の身代わりとして死刑になることを選ぶ。

シャーロック (sherlock)「私立探偵」「しばしば皮肉」(勘のよい) 謎解きの名人、名推理者」/「謎解きをする」「探偵 [推理] する」[動詞] 英国の推理作家・医師アーサー・コナン・ドイル卿 (Sir Arthur Conan Doyle, 1859 - 1930) の探偵小説に登場する名探偵シャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes) の名から。

シュレミール (schelemiel)「不運でへまをする奴」「だまされやすいお人好し」「どじな [馬鹿な] 奴」。ドイツロマン派の詩人・博物学者(本名 Louis Charles Adélaïde Chamisso de Boncourt) アーデルベルト・フォン・シャミッソー (Adelbert von Chamisso, 1781 - 1838) の小説『ペーターシュレミールの不思議な物語』 *Peter Schelemihls wundersame Geschichte* (1814) の中の同名の主人公の名より。[1892] <イディッシュ shlemil <ヘブライ「シェルミエル」(聖書及びタルムード [Talmud])の中で不運な最後を遂げたとされる人物)。

シルエット (silhouette)「影絵」「半面影像 [切り抜き絵や線画などの輪郭の内側を黒く塗りつぶした平面画]」「[一般に] 輪郭」「全体の形」「アウトライン」/「シルエットで描く」[動詞] フランスの政治家エチヤン・ド・シルエット (Etienne de Silhouette, 1709 - 67) の名に因む。彼が蔵相の際の極端な儉約政策を嘲笑した「安物」「不完全なもの」の意を経た転義か。彼が <半面影像> を描くことを趣味にしたためとの説もある。

スクルージ (scrooge) 「守銭奴」「けちん坊」(miser)。ディケンズ作の『クリスマス・キャロル』 *A Christmas Carol* (1843) に登場する意地の悪い守銭奴エブニーザ・スクルージ (Ebenezer Scrooge) から。

スノウシズム (snopesism) 「目的のためには手段を選ばず、なりふりかまわず専ら利己中心に、何の背景もない最下層の位置から社会の上層部へとの上がってゆく成金出世主義、あるいはそういう生き方。フォークナーの作中人物、特にフレム・スノウプス (Flem Snopes) から」[本稿の筆者が厳密に？下してみた定義]。米国のノーベル賞作家ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897 - 1962) が一連の作品、特に『村』 *The Hamlet* (1940)、『町』 *The Town* (1957)、『館』 *The Mansion* (1959) のスノウプス三部作で描き上げた、フレムを中心とするスノウプス一族の姿から研究者の間で早くから使われていた語である。そろそろ一般にも認知されてよさそうである。「スノウプス」(snopes) は、「[特に南部の] 破廉恥な政治家 [ビジネスマン]」[1962. W. Faulkner の *The Hamlet* 中の悪徳な Snopes 一族の名に因む] として辞書に収録されている。

スプーナリズム (Spoonerism) 「スプーナ誤法」[音韻論] [1900] (1885年頃からオックスフォードでは口頭では使われていた)。二語以上のそれぞれの初頭韻が互いに入れ替る頭韻転換現象を指す。例えば “crushing blow” 「圧倒的な打撃」と言うべきところを “blushing crow” 「赤面しているカラス」と言い誤ったり、“well-oiled bicycle” 「十分油を注してある自転車」を “well-boiled icicle” 「煮立っている氷柱」と言ってしまうたり、或いは “half-formed wish” 「半ばしか固まっていない希い」を “half-warmed fish” 「なま温くされた魚」にしてしまうようなのを指す。この種の言い誤りをよく犯したことで悪名高いオックスフォード大学ニューカレッジの学長ウィリアム・アーチボルド・スプーナ師 (Rev. William Archibald Spooner, 1844 - 1930) に因んで生じた語。

「茶がま」を「茶まが」と言い誤ったりするのは、音声学では「音位転換」(metathesis) と呼ぶが、「スプーナリズム」はこれに基づいて起こる。「マラプロピズム」を参照。

スペンロウとジョーキンス (Spenlow and Jorkins) 「自分 [スペンロー] のひどいやり方を仲間 [ジョーキンス] の罪にする狡猾なやり方」。ディケンズの代表作『デイヴィッド・コッパーフィールド』 *David*

Copperfield (1849 - 50) の人物から。

セレンディピティ (serendipity) 「[偶然にも、当てにしていなかった、思いがけない]ものを巧み見つけ出す能力」「掘り出し上手」「運よく発見したもの」「幸運」[1754] 恐怖小説『オトランド城』*The Castle of Otranto* (1764) の作者として特に名高い英国の作家・随想家ホレス・ウォルポール (Horace Walpole, 1717 - 97) がペルシャのお伽噺『セレンディップの三人の王子』*The Three Princes of Serendip* の標題から造語したもの。この物語の主人公たちは、偶然に、明敏なせいもあって、探してもいなかった珍宝をいつも見つけ出していたことに拠る。Serendip はかつてのセイロン (Ceylon) で現在のスリランカ (Sri Lanka) のアラビア語名。形容詞 “Serendipitous” 「偶然見つけた」「幸運な」「偶発性の」 / 「偶然発見する才能のある」「掘り出し上手の」[1943] も、名詞 “serendipper” 「掘り出し上手」も在る。

[タ行]

ダモクレスの剣 (sword of Damocles/Damocles' sword) 「[幸福のうちにも]身に迫っている危険」。シュラーケーサイ (Syracuse) の僭主ディオニュシオス (Dionysius I, 405 - 367 B.C.) の廷臣ダモクレス (Damocles) がディオニュシオス王の幸福をしきりに讃えるので、王は頭上に一本の毛髪で剣を吊しおいた王座にダモクレスを就かせて、王の幸福が如何に危ういものであるかを論じたというギリシャ神話の一挿話に由来する。

タルチュフ (tartuff[e]) 「偽善者」「^{えせ}似非信心家」「ペテン師」。モリエールの、教会高職者の腐敗を突いた五幕韻文喜劇『タルチュフ』*Tartuffe* (1664, 初演) の主人公の名から。「**タルチュフエリー**」(tartuffery) は「偽善的信仰」「似非信心」「タルチュフのような人 [行動, 性格]」を指す普通名詞。

ダンケルク (Dunkirk ; [Fr.] Dunkerque) 「必死の撤退」「一大危機、緊急事態」。フランス北部の港市であるが、1940年に33万人以上の英仏連合軍がドイツ軍の攻撃下で撤退に成功したところから生じた語。「～に必死の撤退をさせる」の意の動詞としても使われる。“do a Dunkirk” 「必死に撤退する」, “face a financial Dunkirk” 「一大財政危機に直面

する。」

タンタライズ (tantalyze) 「[見せつけたり, 無駄な期待を抱かせたりして] じらして苦める, じらす」[動詞] [1597]。ギリシャ神話のタンタロス (Tantalus) から。フリギア (Phrygia) の王で時にゼウス (Zeus) の息子とされる。我が子ペロプス (Pelops) を殺して料理し, 神々に供した罪で冥府の最下にあるタルタロス (Tartarus) につながれた。ここで, 顎まで浸かっている水を飲もうとすると水は引き, 頭上に実った果実を取ろうとするとそれが遠退くという苦悶に偶った。

チャールズ王の首 (King Charles's head) 「[どうしても頭から追い払えない] 固定観念」「強迫観念」「必ず出てくる話題」。Dickens 作 *David Copperfield* の登場人物 Mr. Dick が何を話す際にも「首をはねられた英国王チャールズ一世」の話題を持ち出すことに由来する。

チャドバンド (Chadband) 「信心家ぶった [口の巧みな] 偽善者」Dickens 作『荒涼館』*Break House* (1852 - 53) の中の墮落牧師の名より。

チャパキディック (Chappaquiddick) 「[その人に] 付き纏う過去の打ち消せない忌むしいこと」。1969年7月19日にマサチューセッツ州の Chappaquiddick 島で起きた事件で Edward Kennedy 上院議員運転の車が水没し, 同乗の女性秘書 H. J. Kopechne が水死したが, その報告が大幅に遅れて疑惑を呼んだ。この事件 (Chappaquiddick incident) から生れた語。“That's his ~” 「あれは彼のチャパキディックだね」のように使える。突然有名になり成句に取り込まれることになったこの島にとっては, とんだ有難, いや, 有難くない, 迷惑だったことだろう。

トウィードルダムとトウィードルディー (Tweedledum and Tweedledee) 「名前だけが異なる二人 [二物]」「区別し難いほどに似通った二人 [二物]」「似たり寄つたりの二人 [二つのもの]」「瓜二つの人 [もの]」[1725]。英国の医師・詩人で速記術を考案したジョン・バイアロム (John Byrom, 1692 - 1763) の造語。その諷刺詩の中で技倆伯仲する二人の音楽家ヘンデル (George Frederick Handel, 1685 - 1759) とボノンチーニ (Giovanni B. Bononcini, 1670 - 1750?) とに付けた渾名から。その後ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1737 - 1832 本名 Charles Lutwidge Dodgson) が童話『鏡の国のアリス』*Through the Looking-Glass* (1872) にこの名の瓜二つの男たちを登場させた。

ドッグベリー (Dogberry)「愚かな [へまをやる, 愉快的] 役人」「間抜けな警官」。シェイクスピア (William Shakespear, 1564 - 1616) 作『から騒ぎ』 *Much Ado about Nothing* (1600) に登場する, 言葉の誤用 (後世のマラプロピズムの元祖) と珍妙な言葉遣いで有名な愚かしい警吏の名。しかし彼はそのせいも与ってヒロインの濡れ衣を晴らすのに見事な一役を買っている。

ドン・キホーテ (Don Quixote)「非現実な理想家」「現実を知らない高邁な理想主義者」。スペインの小説家セルバンテス (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547 - 1616) 作の諷刺小説『ドン・キホーテ』 *Don Quixote de la Mancha* (1605, 15) の主人公で, 高潔で騎士道精神には富むものの非現実な理想を抱いている人物の名から。その従者で他人の言葉をすぐ信じる愉快的男サンチョ・パンサ (Sancho Panza) とのコンビは世界に冠たる永遠の一对である。

[ナ 行]

ニムロド (nimrod)「狩猟の名人」「狩猟好きの人」。バイブルの創世記10章8 - 10節に登場するノア (Noah) の曾孫で狩猟の名人 Nimrod の名から。

ノラ (Nora)「一人の人間として目ざめた女性」。ノルウェーの劇作家・詩人ヘンリック・イブセン (Henrik Ibsen, 1828 - 1906) 作の戯曲『人形の家』 *Et dukkehjem* (1879) のヒロイン Nora Helmer から。19世紀後半における女性解放運動の象徴とされた。

[八 行]

バウドラリズム (bowdlerism)「バウドラ一流削除訂正」[1869] 他人の著作物の不穏当・野卑と思われる箇所や文句をむやみに削除訂正することを指す。スコットランドの医師トマス・バウドラ (Thomas Bowdler, 1754 - 1825) は、『家庭のシェイクスピア』 *The Familiar Shakespeare* 10巻を編集出版した (1818) が, 彼はその際に, シェイクスピアの原作から道徳上いかがわしいと思われる所を遠慮なく削除し訂正したのである。それに由来する語。「バウドラ化する」

(bowdlerize) なる動詞の方が先に [1836] 生じた。

パーク (burke) 「[暴力の跡を残さないように] 扼 [絞] 殺する」 「[調査や議案などを] 握りつぶす, うやむやに葬る」 「[噂などを] もみ消す, 黙殺する」 「動詞」 [1829] スコットランドの首都エディンバラ (Edinburgh) の解剖学校に死体を売るために, 通行人を次々に自宅に連れ込んでガスを多数の人を窒息死させたというアイルランド人のウィリアム・パーク (William Burke, 1792 - 1829) の所業に困む。“burker”, “burkite” なる名詞の生みの親ともなったこの血迷った狂人とも言うべき人物は, 無論, 絞首刑に処せられた。せめて世の教訓として償いを, という天の配剤による語彙化でもあろうか。

バックリーの機会 (Buckley's chance) [オーストラリア, ニュージーランドでの俗語] 「全くチャンスの無いこと」 「絶望」 [1898] 32年間の逃亡生活の後1855年に自首して翌年死んだ William Buckley からとされる。一説では Melbourne の Buckley and Nunn 社と none との押韻俗語。“Buckley's hope”, “Buckley's and none”, “Buckley's” とも。

パパラッチ (Paparazzi) [パパラッツォ (paparazzo) の複数形。元来イタリア語] 「[精力的に有名人を追い回す] 自由契約 [フリー] のカメラマン」 [1961] イタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニ (Federico Fellini, 1920 -) の『甘い生活』 *La dolce vita* (1959) に登場するような写真家の渾名から。英国の作家ジョージ・ギッシング (George Gissing, 1857 - 1903) の『イオニア海経由で』 *By the Ionian Sea* (1901) に登場するホテル経営者の名前に困む。フェリーニは映画製作時にそのイタリア語訳を読んだ。ダイアナ妃の事故で俄然世界中で知らぬ者のない有名な語となったが, 作中人物の名に由来するのである。

バビット (Babbitt) 「[金銭上の成功のみを理想とする] 低俗で教養のない実業家」 「俗物 (Philistine)」 「自己の所属する社会の道徳基準内に留まろうとする人物」。Sinclair Lewis の同名の小説の主人公で土地家屋周旋業者 George F. Babbitt から。しかし彼は人間味豊かな人物として造形されている。

ハムレット (Hamlet) 「憂鬱で瞑想的な人」 [シェイクスピアの四大悲劇の一つ『ハムレット』 *Hamlet* (初演1600 - 1) の主人公のような] 従来長らくそのように考えられてきて, ハムレットは思索型の人として行動型のドン・キホーテと対照されてきたが, 行動家としての Hamlet

解釈が現われてからも久しく、必ずしも明解に一つの型には嵌め込めない。そういう主人公の活躍する作品だからこそ、『ハムレット』は古典中の古典なのであろう。

バルマク家の人 [王子] (Barmecide) 「見掛けだけの饗応をする人」 「空の恩恵を与える人」。『千夜一夜物語』中の「六番目の兄弟について語る床屋の話」に出てくる並ぶ者のない権勢と富を有していた Bagdad の貴族だが、Schacabac という乞食を呼んでもてなすのに珍味と称して次々からの皿を出して手まね身ぶりでご馳走したという話から。「**バルマク家の馳走**」(Barmecide feast) 「内容の貧弱な見掛け倒しの饗応」 「架空の御馳走 [利益]」なる成句もある。

パンドラの手篋 (Pandora's box) 「不測の難儀や問題を生み出すもの」 「一見貴重にみえる」のろわれた贈物、「災いの源」。火の使用を知った人類を罰するためにゼウスの命令で工匠のヘーパイストスによって造られた最初の女性パンドラー（「全ての贈物である女」の義）は、人類を悩ますあらゆる害悪を封じ込んだ罫（手篋は後伝）と共にエピメテウスに贈られたが、好奇心に負けたパンドラーがそれを開けたので中から諸悪が飛び出し、希望だけが中に留まったというギリシャ神話に由来する。

ハンブティダンブティ (Humpty Dumpty, 時には, h - ,d - .) 「ずんぐりむっくり」「ずんぐりした人」「一度壊れる [倒される] と元に戻せないもの [人]」「転んだら容易に起き上がれない人」。英国の童謡 *Mother Goose* に登場する卵型の人物の名。塀の上から落ちて割れてしまう。Humpty Dumpty sat on a wall, / Humpty Dumpty had a great fall; / All the King's horses and all the King's men/ Couldn't put Humpty together again. (ハンブティダンブティ塀の上に座って/ハンブティダンブティすっころんで落ちた/王様の騎兵も誰一人/ハンブティを元に戻せなかった)。「言葉の意味を自分勝手に変えてしまう人」Lewis Carroll 作 *Through the Looking-Glass* 中の人物名から。“in humpty dumpty fashion” 「勝手気ままな意味で」。米国の幼児向けポケットサイズの雑誌に *Humpty Dumpty's Magazine for Little Children* がある。

バンブル (bumble) 「勿体ぶった小役人, [特に] 教区吏員」 [1856] Charles Dickens 作『オリヴァー・トウィスト』 *Oliver Twist* (1837 -

39) の中の教区吏員 (beadle) の名から。「**バンプルダム**」 (bumbledom) 「うるさい小役人根性 [社会]」。

ピーターパン [症候群] (Peter Pan[syndrome]) 「永遠の少年」, 「いつまでも子供みたいな人」 「いつまでも大人になり切れないでいる症状」。

スコットランドの劇作家・小説家バリー (Sir James M[atthew] Barrie, 1860 - 1937) の児童物語劇 *Peter Pan* (1904) の主人公で Kensington Gardens の Never-never Land に住む永遠に生後 7 日のままの幼児 Peter Pan に因む。ケンシントン公園に像が建てられた (1912)。米国の臨床心理家ダン・キリー (Dan Kiley) の著作 *Peter Pan Syndrome* (1983) がある。

ビュリダンの驢馬 (Buridan's ass) 「決断の出来ない人」 「煮え切らない人」。一頭の口バから等距離の二か所に等質等量の乾草を置くと、その口バはどちらを先に食べようかと迷い続けて遂には餓死するに到るという論理。パリ大学で活躍し、二度学長に選出された自然哲学・論理学者ジャン・ビュリダン (Jean Buridan, c1295 - c1358) の意思決定理論に対する反駁として提出されたものらしいという。

ピュロスの勝利 (Pyrrhic victory) 「 [非常な犠牲を払って得た] 引き合わない勝利」。古代ギリシャのエペイロス (Epirus) の王 (307 - 305, 297 - 272 B.C.) であったピュロス (Pyrrhus, 318 - 272 B.C.) はアスクルム (Asculum) の戦いでローマ軍を破った (279 B.C.) が、両軍とも殆んど同数の死傷者を出したことから。

大損失の末に得た犠牲の大きな勝利としては「**カドモスの勝利**」 (Cadmean victory) も知られている。これは、ゼウス (zeus) に誘拐されたフェニキア (Phenicia) の王女エウロパ (Europa) の後を追ってギリシャに来た王子カドモス (Cadmus) に因む語句。彼が龍を退治してその歯を撒くと、たちまちそれらが軍兵と変じて逆襲してきたので、彼は宝石を投じて軍兵たちがそれを争って同士討ちを始めた隙に乗り、ようやく危機から逃れることが出来た。その時生き残った五人の勇士と共に、彼は古代ギリシャの都市テーベ (Thebes) を創設したという。

フィガロ (Figaro) 「機知に溢れた嘘つき」。フランスの劇作家ボームルシエ (Pierre Augustin Caron de Beaumarchais, 1732 - 99) の劇『セヴィリアの理髪師』 *Le Barbier de Séville* (1775) , 『フィガロの結婚』 *Le Mariage de Figaro* (1784) , モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart,

1756 - 91)の歌劇『フィガロの結婚』*Le Nozze di Figaro*, K.492(1787), ロッシーニ(Gioacchino Antonio Rossini, 1792 - 1868)の歌劇『セヴィーリアの理髪師』*Il Barbiere di Siviglia* (1816)に登場する機知溢れる理髪師から。

フェイギン(fagin)「子供に悪事を教え込む人」「子供たちに盗みを仕込む親分」。Dickens作*Oliver Twist*に登場する、子供たちを仕込んで泥棒をさせる老悪漢フェイギン(Fagin)の名から。

フーディーニ(Houdini)「巧みな脱出」「抜け出すのが上手な人」「縄抜け師」。ハンガリー生れの米国の魔術師で、脱出奇術で一世を風靡したハリー・フーディーニ(Harry Houdini [本名 Ehrich Weiss] 1874 - 1926)に由来する。

フランケンシュタイン(Frankenstein)「自分の創造したものに滅ぼされる人」。英国の作家メアリー・ウルストンクラフト・シェリー(Mary Wollstonecraft Shelley, 1797 - 1851)作の怪奇小説『フランケンシュタイン』*Frankenstein, or the Modern Prometheus* (1818)の主人公である科学者の名から。彼は自分で創り出した怪物のために破滅する。この作品、21世紀世界の人類へ強烈な警告を発する予言力に充ちた<現代>小説、古典の名作である。「**フランケンシュタインの怪物**」(Frankenstein [’s]monster)は「人造人間」「自分が創出した呪いの種」「創造者への脅威」[1838]の意。

フーリガン(hooligan)「ごろつき、悪党、不良、よた者」「拳銃使い(ガンマン)」「殺し屋」/「ごろつき[無頼漢]のような」[形容詞]。19世紀末のロンドンのサザック(Southwark)に住んでいた無法者のアイルランド人一家の姓 Houliham に因むといわれるが未詳。「**フーリガニズム**」「hooliganism」は「乱暴」「無頼生活」「無法な蛮行」「ごろつき気質」の意。この語は特に近年サッカー競技で騒ぎ回る連中が現われて有名になった。

フレッチャリズム(Fletcherism)「フレッチャー式食事法」。空腹時にだけ食事をして食物を十分に噛みこなす健康食事法のこと。サンフランシスコの輸入業者として成功したホレス・フレッチャー(Horace Fletcher, 1849 - 1919)は、中年になってから栄養摂取の探求に乗り出し、『栄養摂取のいろは』*The ABC of Nutrition* (1903)なる書物を著し、一口の食物は一本の歯当り一回の総計32回噛むべきだと主張して、国内

全土にこの理論？を説き回った。「[食物を]十分に噛む」という意の「フレッチャー化する」(Fletcherize)なる動詞も生れている。我が国にも、「米」という文字の形から御飯は一口ごとに88回噛むべしなるまずは実行不可能な俗説があるが、32回噛むのも容易ではない。しかし、フレッチャーの信奉者にはあの大財閥を築いたジョン・D・ロックフェラー(John Davison Rockefeller, 1839 - 1937)や発明王のトマス・エディソン(Thomas Alva Edison, 1847 - 1931)もあり、「フレッチャリズム」は食事に関する流行語となった。心理学者でプラグマティズムの哲学者ウィリアム・ジェームズ(William James, 1842 - 1910)は、これを三ヵ月間実行した後、こう言った。“I had to give it up. It nearly killed me.”「私はあきらめねばならなかった、殆んど死にそうになったから。」(Stuart Berg Flexner, *I Hear America Talking*. A Touchstone Book, 1976. p.145) この食事法の流行は、1919年にフレッチャー自身が死ぬまで続いた。食物を何十回噛んでも、死ぬ時には死ぬのだ。

ヘクターの外套(Hector's cloak)「裏切りのしるし」。イングランド最北の州ノーサンバランド(Northumberland)の伯爵トマス・パーシー(Thomas Percy)を密告して裏切ったヘクター・アームストロング(Hector Armstrong)が、最後は乞食となって死んだという16世紀の故事に由来する。“take ~”「自分を信頼した友を裏切る」。“wear ~”「裏切りに対する当然の報いを受ける」。

ベックスニフ(Pecksniff)「偽善者」「猫かぶり」[1913]、「**ベックスニフィズム**」(Pecksniffism)「偽善」/「**ベックスニフィアン**」(Pecksniffian)「偽善的な、猫かぶりの、信心ぶった」[形容詞][1851] Dickensの小説『マーティン・チャズルウィット』*Martin Chuzzlewit*(1843 - 44)の中の偽善者Seth Pecksniffから。

ペックの悪童(Peck's bad boy)「無鉄砲者」「暴れん坊」「悪がき」。米国のジャーナリスト・ユーモア作家ジョージ・ウィルバー・ペック(George Wilbur Peck, 1840 - 1916)作 *Peck's Bad Boy and His Pa* (1883)に登場するわんぱく小僧の名より。

ヘラクレス(Hercules)「大力無双の人」。ヘラクレスの選択(Hercules' choice)「安逸を退けて進んで労苦を選ぶこと」。ゼウスの子で不死を得るために12の難業を遂行した大力無双のギリシャ神話最大の英雄ヘラクレスの名と業績から。

ベン政策 [主義] (Bennery, Bennism) 「私企業に対する国営化や国家介入を推進する政策，そのような方針」。提案者の英国の産業相ベン (Anthony Neil Wedgwood Benn, 1925 -) に因む。

ホーソン効果 (Hawthorne effect) 「労働や教育で，注目されているというだけの事実によってその当事者に生ずる業績の向上」[1962]。この，自分たちが注目されていることを自覚することで，ある実験や研究に参加している人々に現われるプラスの効果が実験で確認されたイリノイ州の工業都市キケロ (Cicero, Illinois) にある Western Electric Company のホーソン工場 (Hawthorne Works) に因む。

ボヴァリスム (bovarysme) 「自己過大評価」「自惚れ」「ボヴァリー夫人気質」[1929]。フランスの作家フロベール (Gustave Flaubert, 1821 - 80) の小説『ボヴァリー夫人』*Madame Bovary* (1857) の主人公の名から。20世紀前半，社会に対する若い女性の情動面での不満足，想像への逃避などを指して使われた心理用語。

ボウ・ブラメル (Beau Brumme[1]) 「しゃれ者」「伊達者」。英国のジョージ四世 (George IV, 1762 - 1830 在位1820 - 30) のお気に入り，紳士服の流行の範を示した洒落男ブラメル (George Bryan Brummell, 1778 - 1840) の渾名に由来する。

ボックスとコックス (Box and Cox) 「二人交替で一人前の役 [仕事] をする人たち」「同時に同一の場所 [職場] に居合わせることはない二人」。/ 「代わる代わるの [に]」「すれ違いの [に]」[形容詞・副詞] / 「二人交代でする」[動詞][1881]。英国の劇作家ジョン・モートン (John M. Morton, 1811 - 91) の同名の一幕喜劇 (1847) から。この作品に登場する John Box と James Cox という二人の男は，互いに知らずに同じ部屋を借りて昼夜交互に勤めに出る。

ポドスナッパー (podsnappery) 「ポドスナップ流態度 [生き方]」「不都合な事実を見まいとし，自己満足に浸る姿勢」。Dickens の作品『共通の友』*Our Mutual Friend* (1864 - 65) の登場人物で自己満足に陥っている男ポドスナップ (Podsnap) より。

ホブソンの選択 (Hobson's choice) 「勧められたものを探るか探らぬかだけの自由」「選り好みの許されない選択」。英国ケンブリッジ (Cambridge) の貸馬車屋の主人トマス・ホブソン (Thomas Hobson, 1544? - 1631) に由来する。彼は手近な馬から貸すことにしていて，「こ

れでなければ駄目”“This or none”と言って客に選択を許さなかった。こうすれば客にも馬にも公平だと考えたのである。

ホレイショー・アルジャー (Horatio Alger)「[ホレイショー・アルジャーの成功物語にあるような]腕一本で叩き上げた人」「立志伝中の人」「[ホレイショー・アルジャー風の]成功は独立心と勤勉とによって得られるとする考え」[1925] / 「ホレイショー・アルジャーの物語に出てくるような」[形容詞] 米国の聖職者・児童物語作家アルジャー (Horatio Alger, Jr., 1832 - 99) は、『ぼろ着のディック』*Ragged Dick* (1867) を初め百冊以上の少年向けの、刻苦勉励して貧困から立身出世する苦学力行物語を書いた。

[マ行]

マエケナス (Maecenas [mi:si:nəs])「文芸・芸術の保護[後援]者」[c1561] 文芸・芸術の擁護者としてホラティウス (Horace [Quintus Horatius Flaccus] 65 - 8 B.C.) やウエルギリウス (Vergil [Publius Vergilius Maro] 70 - 19 B.C.) を後援した古代ローマの政治家ガイウス・キルニウス・マエケーナス (Gaius Cilnius Maecenas, 70? - 8 B.C.) から。アウグストゥス (Augustus, 63 B.C. - A.D.14) 帝を芸術に目覚めさせた功績でも知られる。

マラプロピズム (malapropism)「言葉のはき違い[誤用]」「はき違えられた[誤用された]語」「特に音の類似した語の滑稽な誤用」[1849] アイルランド生れの英国の劇作家・政治家リチャード・ブリンスリー・シェリダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751 - 1816) が、弱冠22歳の時に書いた喜劇『競争相手』*The Rivals* (1775) にはマラプロップ夫人 (Mrs. Malaprop) なる頑固な気取り屋の老婦人が登場し、言葉の誤用でさんざん笑いを誘発した。「マラプロップ」とは、目的から外れているという意味のラテン語の語根から作者が造語したものが、大変な人気を博する性格を造形したことになる。この登場人物名から現在も活用される普通名詞が生じたのだから。

「マラプロピズム」とは、“loquacity”「おしゃべり」を“locality”「場所」と言ったり、“instinctive”「本能的な」を“insensitive”「感受性の鈍い」と言い違えたり、“emotion”「感情」と言うつもりで“commotion”

「動揺」と言い誤ったり、或いは、真の意味を“comprehend”「理解する」と言うつもりで“reprehend”「非難する」と言ってしまったり、学問の“progress”「進歩」と言ったつもりが“progeny”「結果」「子孫」になってしまい、“arrangement”「調停」を“derangement”「攪乱」にしてしまう、という類の誤りを指す。「スプーナ誤法」を故意に犯してしばしば冗談が言われるが、「マラプロピズム」も笑いの喚起に利用される。

シェリダンはこの処女作で大成功を収め、一挙に劇作家としての地歩を固め、二年後には『競争相手』と共に不朽の名作である『悪口学校』*The School for Scandal* (1777) を発表し、その後も矢継ぎ早に成功作を上演したが、『批評家』*The Critic* (1779) を以って劇作家としての活動は終え、28歳以後は下院議員として32年間の議会生活を送ることになる。

政界では概ね野党側に在って、終始清廉高潔な志操と流麗爽快な弁舌で鳴り渡った。殊にその雄弁では、名だたる演説家揃いを以って世界に冠たる英国議会史上でも、彼に比肩する者がいないとまで言われる程である。ウェストミンスター大寺院 (Westminster Abbey) の詩人コーナー (Poets' Corner) に、彼の同時代の名優デイヴィッド・ギャリック (David Garric, 1717 - 79) と並んで、シェイクスピアの胸像に見おろされながら現在は眠っている。

ミコーバー (Micawber) 「楽天家」、ミコーバリズム (Micawberism) 「空想的楽天主義」「たなぼた主義」。Dickens 作 *David Copperfield* の登場人物で、打ち続く不運の中でも今に運が開けるだろうと信じ待ち望んでいる楽天家の下宿の主人ウィルキンス・ミコーバー ([Mr .] Wilkins Micawber) に因む。

モートンの^き二義論法 (Morton's Fork) 「巧妙な言いぐるめ」「非詭弁風詭弁」[1889]。金持ちは金がある、質素な暮らしをする者は必ず蓄えがある、従って両者とも税は払える、という論法。ヘンリー七世 (Henry VII, 1457 - 1509, 在位1485 - 1509) の時代のキャンタベリ大司教・大臣ジョン・モートン (John Morton, c. 1420 - 1500) がこの種の論法を用いたのでその名に因む。

[ラ行]

ラDRAMの犬 (Ludlam's dog)「怠け者」。イングランド南東部サリー州のファーナム (Farnham [fá:rnəm] Surrey) 近くにある洞窟にいたという魔法使いの飼い犬に因む。吠える時も壁に頭をもたせかけたままだった。“(as)azy as Ludlam's dog that leaned his head against a wall to bark”「ひどい怠け者で」。

ラパリスード (lapalissade)「自明の理」「分り切ったこと」[1872] “S'il est malade, c'est qu'il n'est pas en bonne santé.”「病気とは健康を害していることだ」の類いの表現を指す。16世紀の勇将ラ・パリス (La Palice [Jacques II de Chabannes, seigneur de,] 1470? - 1525) に因むもの。イタリア戦争で多くの武勲を挙げたが、パヴィアの戦いで倒れたこの將軍の勇猛果敢な戦いぶりを讃えた古い民謡の一節 “Un quart d'heure avant sa mort, il était encore en vie.”「死ぬ15分前には、彼はまだ生きていた」は、本来は、死の寸前までなお彼は勇敢に戦った、という意味の表現だったのだが後に「死の寸前までなお彼は生きていた」という字義どおりの当り前の意味に解釈されるようになったことに由来する。ジェームズ・ジョイス (James Joyce, 1882 - 1941) の『ユリシーズ』 *Ulysses* (1922) [第9挿話の初めの辺り] では、図書館でスティーヴン (Stephen) が館長のことをそっと嘲って “Monsieur de la Palisse... was alive fifteen minutes before his death.” (Bodley Head 版 p.235) 「ラ・パリス氏は死ぬ15分前には生きていたか」と口にするのが印象深い。尚、「ラ・パリスの真理」 “vérité de La Palice” なる成句もあって、これなら人名に由来することが直ぐ判るが、「ラパリスード」は人名の中の綴り字 “c” も “s” になり、小文字で始まる単語となっていて、一見では人名起源の普通名詞とは判り難い。普通名詞化の進化の度が高いと言えよう。

英仏語では人名など固有名詞は大文字で綴り始め、普通名詞は通例小文字で綴るのは周知のことだが、これまでの例でも「ゴールドウィニズム」や「フレッチャリズム」などは、まだ大文字で始められる語で、それだけ尚も固有名詞の度が残存している。ホブソンやヘラクレスは、はっきり固有名詞であるから大文字のままである。以上のような事情は、本稿のこれまでの例の殆んどに当て嵌まる。

ルクレチア (Lucretia)「貞節 [操] の鑑」。古代ローマの伝説中の貞婦に因む。ローマ王 Lucius Tarquinius Superbus (Tarquin) の息子

Sextus に暴行されたこの賢夫人は、夫と父にその報復を願った後自殺した(510 B.C.)。そのためタルクィニウス家はローマを追われ、王制が廃止されて共和制が樹立されるに至った。

ルーブ・ゴールドベルグ[イアン](Rube Goldbergian)「[簡単に出来そうなことをするのに用いる]非常に手の込んだ機械[計画][仕組み]等」/「ごちゃごちゃした」「複雑すぎて実際的でない」「必要以上に込み入った」[形容詞][1954]。米国の漫画家・彫刻家ルーベン・ゴールドベルグ(Reuben I[ucius]Goldberg, 1883 - 1970)の通称から。彼の漫画がそのような様相を示していたので。

ロートス食^はみ(lotus-eater)「[実際の生活から遊離した]安逸に耽る人」「快楽主義者」「夢想家」[1832]。ギリシャ語“Lōtophágōi”「ロートパゴイ」の翻訳“lotus-eaters”の単数形。lotus(その実を食べると夢見心地になって一切の浮き世の苦しみを忘れることができるという想像上の植物)の実を食べて一切を忘れ、至福の境地に暮らしていた人々にオデュッセウス(Odysseus)が帰国途中で出逢ったことに由来する。ホメロスの『オデュッセイア』(Homer, *Odyssey*, ix. 82 - 104)参照。英国の桂冠詩人テニスン(Lord Alfred Tennyson, 1809 - 92)作『ロートパゴイ』*The Lotus-Eaters* (1832) 全173行の詩 がある。

ロリータ(Lolita)「早熟な娘」「性の魅力に溢れた少女」。ウラジミール・ナボコフ(Vladimir Nabokov, 1899 - 1977)の名作『ロリータ』*Lolita* (1955)の女主人公の名から。12歳の少女ドロレス・ヘイズ(Dolores Haze) 愛称がロリータ は、作中人物の亡命の文学者で性倒錯者のハンバート・ハンバート(Humbert Humbert)から<ニンフェット>と定義される<選ばれた者たち>の一人である。彼は言う。“Between the age limits of nine and fourteen there occur maidens who, to certain bewitched travelers, twice or many times older than they, reveal their true nature which is not human, but nymphic (that is, demoniac); and these chosen creatures I propose to designate as ‘nymphets.’ ” 「9歳から14歳を限度に、二倍ないしはそれ以上年長のある魅了された旅人たちに、人間らしからぬ妖精じみた、つまり悪魔的な本性を現わす少女が現われることがあり、この選ばれた者たちを<ニンフェット>と名付けたい」と。

この早熟な少女の名前は即、この作中で描かれる人物や状況を想起さ

せる類似の人々や状況を指す普通名詞として正式に認知（OEDに採用
[1960] 1959年には“Lolitaland”として、“Lolitaish”は1960年に）された。

【ワ 行】

ワトソン博士(Dr. Watson)「天才の引き立て役」。英国の医師・推理小説家 Sir Arthur Conan Doyle の作品に登場する名探偵 Sherlock Holmes の親友で事件の語り手を務める医師の名。「シャーロック」の項参照。

*

本稿は最初にも断ったとおり、筆者が特に興味を抱いてこれまでに一度は自らの作品や文章、日常会話などで嬉し気に？ 使ったことのある、あるいは、使ってみたいと思っている普通名詞化固有名詞の類を、思いつくまま勝手に取捨選択してその説明の記述の濃淡を敢えて物ともせず

というところが「随想風に」なのだが、若干取り上げてみたものである。当然ながら、本稿の項目となるべき、そして、なってもいいと思われる語彙は、ギリシャ・ローマ神話、バイブル、シェイクスピア、その他世界中の諸々からのものが無数に存在するであろう。現に、今更と思われる「サド[サディズム]」「マゾ[マゾキズム]」などを初めとして、筆者自身が割愛したものも少なくないが、この小「辞書」に収録したものが、「換(代)称」用以外にも何らかの参考・示唆に幾らかでも役立つ<資料>の一端にもしなれるなら幸いである。

これらの語彙は、いずれもその基になっている、あるいは引きずっている固有名詞が関わっている<物語>のせいで、その「内包・含蓄」(Connotation)が豊かなために、それを筆舌にのせるとその文脈がそれだけ一層深まり広がるであろう。本稿に収録したのは、そのような文脈を膨らませる語彙群である。

我々は作者であろうとする際には、ポール・ヴァレリーの至言、「作者への忠告：二つの言葉の中ではつまらない方を選ぶこと。(この細やかな忠告は哲学者にもお聞き願いたい)」を、拳拳服膺実践したいものだが、平凡な語句を正確に連ねた冷厳に収縮する文脈の積み重ねに、時折りは温かく寛く膨張する文脈を混淆させることも、文全体の彩り・綾及び作品の味わい・興趣には必要ではあるまいか。メダカだけを集めて

ユニークで独特な水槽を演出するのはおそらく至難の業であろうし、それ故それに挑戦することは肝要だが、そこへ金魚を一匹投入したらその水槽の趣きは忽ち変わるだろう。その変化が気品の備わった価値あるものになるか、下品に墮するかは、如何なる金魚をどのように何時参加させるか次第であろう。そのさまざまな金魚の一群れ、それを一つの試みとして、本稿に集めてみた。

私は、「推敲」なる語が殊の他好きなのだが、それはその意味内容が感銘深いせいだけではない。この語が、字面には賈島も韓愈もその名を痕跡すら留めていないのに、口バの背の上で自作詩の中の一句を「推す」にするか「敲く」にするか無我夢中で手ぶり身ぶりを混じえながら呻吟検討する詩人の姿を、常に髣髴とさせて私を感動させるからである。固有名詞が事蹟、故事来歴共々しっかり内部に吸収され滲透している普通名詞になっているところが、私の気に入っている所以である。

本稿執筆に当っては、OED 初め下記の辞書類は改めて参照し、その中の辞句も利用させていただいた。尚 本稿には次の既発表拙稿二篇「普通名詞になった人々」*American Literature Tsukuba*, No. 5, pp. 48 - 53 . (1991年3月)と「語彙を生み出した人々 天の配剤?」*光陰* No. 44, p.1. (1998年12月)が包含されている。

注

この意味での文献初出年。

“CONSEIL À L'ÉCRIVAIN: Entre deux mots, il faut choisir le moindre.
(Mais que le philosophe entende aussi ce petit conseil.) Paul valéry,
CEUVRES, Tome II (Bibliothèque de la Pléiade) p.555.

参照辞書 (順不同)

- The Oxford English Dictionary
- Brewer's Dictionary of Phrase and Fable
- 『ランダムハウス英和大辞典』(小学館)
- 『新英和大辞典』第6版(研究社)
- 『リーダーズ英和辞典』第2版(研究社)
- 『小学館ロベール仏和大辞典』
- 『廣漢和辞典』(大修館書店)
- 『広辞苑』(岩波書店)
- 『岩波哲学思想事典』
- 『職人ことば辞典』(桜楓社)